

私が飯島晴子と接するようになるのは、高柳重信編集長時代の「俳句研究」座談会に同席してからのことである。この座談会は主要俳誌の編集長クラスが集って、熱い論議がくりかえされたものだが、そのうち重信の口添えでグループを形造り、紅一点の晴子の名をとって「晴の会」と称するようになった。伝統派から前衛派まで、メンバーは多士済々であつたが、みんな多忙であつたし、一つにまとまりにくいこともあつて、阿部完市、晴子、私の三名が残り、やがて解散ということになった。私はその後「鷹」に入ることになり、晴子と仲間になるのだが、自分の俳誌「鷹」の経営が難しく、一年ほどで「鷹」は離れることになった。それから長い時間が過ぎ、次に晴子と接するようになったのは、日本詩歌文学館賞の選考委員になった時。三年任期の委員として選考、贈賞式、見学会を共にしたのだったが、三年目の贈賞式、見学会に晴子は出席せず、程なくその訃報を耳にしておどろくのである。

晴子はいつもやさしくそばにあつたが、私はそのことばにほんぽんと斬られるのをおそれて、あまり口をきかなかつたように思う。「先生ごっこをしてもしょうがない」などとすぐ言われてしまうからである。けれどもそばに黙っているだけで幸せと思う雰囲気は晴子にはあつてそれが嬉しかったのである。そうした晴子の片言隻語で今もくつきり残っているのは、「私の作り方はホトトギスの作り方とほとんど同じ」ということばである。これは「晴の会」時代に聞いた。晴子が京都へ行き波多野爽波らと吟行句会をしてきたあとに私らに話したことばであつた。そして同じことを詩歌文学館賞の選考の際にも、私や深見けん二に話しておられたのであつた。「ホトトギス」の作り方は写生だが、晴子も自分も写生だと言いたかつたのだらう。が晴子の場合には、ものを見る感性がもつと鋭くもつと主観的で、つねに自分にはげしくかわるのである。ただもの

と自分が一枚につながっているところで、両者は近い関係にあるのである。ことばを変えれば、正直な人、黙っておれない人、というふうに言うことも可能で、それが肺腑をつくとも毒舌とも辛辣とも感じられる理由となるのである。つまり批評する人ということだ。彼女の評論もだから同質のものといえようか。

晴子をはじめ能村登四郎の指導で俳句をはじめ、次いで水原秋桜子の選を受け、藤田湘子の「鷹」創刊に同人として参加、『蕨手』を刊行したという。そのいわば俳句以前の時期を、

泉の底に一本の匙夏了る

という一句にまとめて俳句をはじめていったというのはまことにめざましい覚悟のようだ。この句、写生句ではあるが、なにかおもい意味をたたえた匙ではないか。これは「ホトトギス」とちよっとちがうのである。

このあと晴子は「晴の会」の時代をむかえて、もっとも言語宇宙の写生にのりだす。

天網は冬の董の匂かな

玉葱はいま深海に近づけり

氷水東の塔のおそろしく

ことばを解きはなつてみて、そのことばが自由奔放に働きはじめ、言語自律空間のおもしろさに存分に身をやつてみたのである。

けれども晴子はもうすこし無作為の世界、あるがままの世界にもどつてきてしまう。言語空間を身構えなしに、おのれの自然の形のままにあそびはじめるのである。

うしろからいぼたのむしと教へらる

八頭いづこより刃を入るとも

そしてその自然世界にあそびながら、やはり老いを自覚せざるをえなくなるのである。

蛍の夜老い放題に老いんとす

老いをうたうが、卑下せず、誇りたかく、奔放にうたうのである。だから私はこつこつこころの動きを老懶と呼

んで、蕪村につながる句法としたのだ。この老懶については私は晴子から「もつたいたい」との礼状をいただいているのである。

みぞはぎは大好きな花 愚図な花

この句を読むと、やはり三橋鷹女を思い出さざるをえない。つはぶきはだんまりの花 嫌ひな花 であるつか。鷹女の場合には、だんまり、嫌いと同質につながるが晴子の場合には、大好き、愚図と反転するのである。晴子は鷹女よりもっときつい女性であった。

さつきから夕立の端にゐるらしき

蓑虫の蓑あまりにもありあはせ

句集『儂々』の代表句だが、なんとシンプルなうたい方。晴子はものと自分の回路をできる限りさりげなくしようとしたのだ。そして遺句集『平日』。

月見草ここで折れてはおしまひよ

葛の花来るなど言つたではないか

晴子はやさしかった。他人をばげました。しかし自分は「折って」しまったのである。